

大乘菩薩道における無相と滅尽定の背景について

太 田 露 子

はじめに 『入中論』の菩薩階梯を確認すると、第六地から第八地の展開の中で「滅尽定」が重視されている。一方、『修習次第』の中で示される菩薩の十地においては、第六地から第八地の流れの中で「無相」(animitta)の獲得が示される。本稿ではまず、『入中論』における滅尽定、『修習次第』の菩薩階梯における無相の用例を示し、関連する文献と共に確認していきたい。その上で、ニカーヤ文献における無相の用例を検討し、大乘菩薩の菩薩階梯において示される無相と滅尽定との関係性を知る手がかりとしたい。

1. 『入中論』の菩薩の十地にあらわれる滅尽定 まずは、『入中論』における滅尽定の用例を確認したい。

第六地

現前〔地〕において等至している心に住し、等覺者の法を現前にし、これを縁として生ずるといふ眞實を見る彼（第六地の菩薩）は、般若〔波羅蜜〕に住することから、滅に至る。（MA VI.1）

以上のように、彼（第六地の菩薩）は、智慧の光により光明が明るくなり、自らの手の中にあるアーマラカのように、これら三有は残りなくはじめから生じることがないと覺て、言説諦によって滅に至る。（MA VI.224）¹⁾

第七地

〔菩薩は〕この遠行〔地〕においては、刹那、刹那において、滅に入定し、はげしく燃える方便波羅蜜を得る。（MA VII.1abc）

第八地

彼（第八地の菩薩）の願〔波羅蜜〕は極めて清浄になり、勝者（仏陀）たちが〔菩薩を〕滅から起き上がらせる。（MA VIII.2ab）

『入中論』の菩薩地においては、第六地の菩薩が滅尽定を獲得するというプロセスが示される。チャンドラキールティは註釈において「滅尽定」を眞如・實際(bhūtakoti)への入定と解釈し、一切の戲論が滅した状態であるという²⁾。『入中論』の第六地は中觀思想に基づいて縁起の眞實を証得する次第が示され、その最終段

(124) 大乘菩薩道における無相と滅尽定の背景について (太 田)

階で滅尽定の獲得がある。そして、第七地では菩薩は、滅尽定に刹那ごとに巧みに入定する徳性を獲得する。その上で、第八地では菩薩が滅尽定に入定したままであると諸仏が菩薩を定より起こすと説かれる。この第八地の議論は、大乘の菩薩に課せられた有情利益の側面が色濃く出ているものである。つまり、高度な禪定に入定したまま般涅槃するのではなく、それを獲得した上での有情利益の実践が菩薩には課題とされている。

この菩薩の階梯において滅尽定が重視される思想は、チャンドラキールティが『入中論』を書き著す際に依拠した『十地経』の所説に基づいているとまずは言える³⁾。しかしながら『十地経』本体では滅尽定は特に重要視されている訳ではない。チャンドラキールティがこのような菩薩道を示したのは、ナーガールジュナが『ラトナーヴァリー』において示した菩薩の十地の中で、滅尽定が重視されている点の方が大きな要因であろう⁴⁾。

2. 『修習次第』初篇の菩薩の十地にあらわれる無相 次に『修習次第』初篇の菩薩十地に示される無相の用例について確認したい。『修習次第』は「止」と「観」に基づく修行法を中心として、大乘菩薩の実践階梯を説き示す論書である。その実践階梯のクライマックスが菩薩の十地であるが、その十地に着目すると、第六地から第八地の流れの中で、無相 (animitta) が重視されていることが見て取れる。

第六地

〔それが〕出来たとき、この支分の完成として第六地が定立されている。こ〔の地〕で、菩薩は、縁起の修習に住しているから、般若波羅蜜が一だんとすぐれたものとなる。まさに、般若波羅蜜が一だんとすぐれた状態にあるということから、仏のあらゆる特性に直面する者がこの地で出現するということで、〔この地は〕現前〔地〕と云われる。かれは無相に住することを得た者となる。〔しかし、〕間断なく無相住に入定することは出来ない、その限りが第六地である。(BhK I 226.19-227.1; 一郷 [2011: 52])

第七地

〔それが〕出来たとき、この支分の完成として第七地が定立される。この地でも、菩薩は、あらゆる相を無相をもって洞察し、しかも、定義付けされて成り立つ言語的表示を排斥しない。このことから、こ〔の地〕で方便波羅蜜が一段とすぐれたものとなる。そして、この地は、無功用道 (第八地) と直結するから、〔すなわち〕非常に遠くに来ているがゆえに、遠行〔地と云われる〕。かれは無相に、間断なく住する者となっている〔が、その〕無相住に、無功用に流れるようには入定することが出来ない。その限りが第七地である。(BhK I 227.1-9; 一郷 [2011: 52])

第八地

〔それが〕出来たとき、この支分の完成として第八地が定立されている。そして、この地においては、無功用に善品に勤めるから、願波羅蜜が一だんとすぐれたものとなる。無

相への功用から動じるということがないから、こ〔の地〕は不動〔地〕と云われる。かれは、無功用に無相に住する者となっている。〔しかし、〕同義語や語源解釈等の分類をもって、あらゆる様相で〔説かれている〕すべての教えを説示することに自在となりえない、その限りが第八地である。（BhK I 227.9-15；一郷 [2011: 53]）

『修習次第』は、菩薩が第六地において無相に住することを獲得すると言う。その上で、第七地では間断なく無相に住しつつも無功用には入定することができないが、第八地においてそれが可能となる有り様が説かれている。そして、第八地以降では、無功用に無相に住することが出来るようになってこそ可能な有情を成熟させる菩薩行を行う有り様が示される。この様に、第六地から第八地の流れの中で無相に住する姿が示される。この『修習次第』における無相の趣意は、先に確認した『入中論』における滅尽定と大差ない。つまり、菩薩階梯における高度な定の状態を示しており、それを獲得した上で自在なる有情利益が可能となる。

この『修習次第』において示される菩薩の十地の記述は、カマラシーラも述べているように『解深密経』第9章に基づくものである⁵⁾。

3. パーリ文献における無相の心定

3.1. 「想受滅定」の位置に「無相の心定」が位置する用例 そこで第3章においてはパーリニカーヤ文献に遡り、禪定段階における無相の用例を確認しつつ、滅尽定との関係性を探りたい。阿含・ニカーヤ文献によると、四禪定・四無色定の上の最高位の禪定として想受滅定（滅尽定）があるとされる。一方、無相の心定（animitta-cetosamādhī）や無相の心解脱（animitta-cetovimutti）という用語が見られ、禪定階梯の中で重要な位置を占めていると思われる。そして、用例としては少ないものの、四禪定・四無色定のより高位の禪定として、無相の心定が示される用例がある。それを以下で確認したい。まずは、MN 第121経「小空性経」の教説である。「小空性経」において、比丘は村・人の想、地の想、空無辺処の想、識無辺処の想、無所有処の想、非想非非想処の想によって順に観察し、存在しないものに関しては空であると見、そこに残るものは存在していると理解する。そして、その四無色定より上位の定として以下に示す無相の心定が登場する。

つぎにまた、アーナンダよ、比丘は無所有処の想を作意せず、非想非非想処の想を作意せず、無相の心定によって一つの状態を作意します。無相の心定に、彼の心は、跳ね入り、清まり、確立し、信解します。彼は以下のように知ります。「まさにこの無相の心定も作り出されたものであり、思惟されたものである。さらに、いかなる作り出され、思惟されたものも、無常であり、滅する性質を持つものである」と知ります。このように知り、このように見る彼には、欲の煩悩からも心が解脱し、有（生存）の煩悩からも心

(126) 大乘菩薩道における無相と滅尽定の背景について (太 田)

が解脱し、無明の煩惱からも心が解脱します。(MN, PTS, vol. III 108.10-20)

このように当該文献は比丘が四無色定を経て無相の心定に住し、欲・有・無明の煩惱から心が解脱すると言う。次に、SN の用例を確認したい。当文献は四禪定・四無色定を説き、最後に無相の心定について以下のように述べる。

「無相の心定、無相の心定」と言われる。では無相の心定とはどのようなものか。友たちよ。この私（モッガラーナ）に次のような思いが生じた。この世で、比丘が、すべての相を作意しないことから、無相の心定を達成して、住する。これが無相の心定と言われる。友たちよ。まさにこの私は、すべての相を作意しないことから、無相の心定を達成して住している。(SN, PTS, vol. VI 268.32-269.5)

このように九次第定であれば、想受滅定が説かれる位置に無相の心定が位置している。上記の SN の教説に対して、シュミットハウゼンは用語の違いには注意する必要があるとしつつも、想受滅定と無相の心定とは綿密に関係していると言えるのではないかとしている⁶⁾。一方、ブッダゴーサは上で引用した SN に対して以下のように述べている。

「すべての相を作意しないことから、無相の心定を達成して住した」とは、あらゆる常・楽・我の相を作意しないことによって、出定に到る観に相応する無相の心定、すなわち涅槃を所縁とするより上の道の果となる定を達成して住したのである。(Sāratthappakāsinī, PTS, vol. III 90.16-21)

このように、無相の心定は出定に至る観であり、涅槃を所縁とする果定 (phalasamādhī) であるとされる。次節では、ブッダゴーサの註釈に着目し、果定とされる無相の心定がどのように定義されているのかを確認したい。

3.2. 想受滅定の果定 (phalasamāpatti) として位置づけられる無相の心定 MN 第 43 経「大有明経」では死去している者と、想受滅定に入定している者との差違は何かということが問いとして示される。入定者も死去した者と同じように身・口・意の行は滅しているが、寿命が尽きることはなく、熱があり、感官が清浄であるという。その議論の流れの中で次のようなことが論じられている。

友よ、無相の心解脱に入るためには、二つの縁があります。つまり、すべての相を作意しないことと、無相の界を作意することです。尊者よ、無相の心解脱に入定するためには、これら二つの縁があります。(MN, PTS, vol. I 296.27-30)

同経典内で「ここに比丘は一切の相を作意しないことから無相の心定に達して住しています。友よ、これが無相の心解脱と言われます」(MN, PTS, vol. I 298.2-4) という一節があることから、「無相の心解脱」とは「無相の心定」と同義であると

いえる。これに対してブッダゴーサは以下のような註釈をしている。

「無相の」とは、ここで何を問うているのか。滅尽〔定〕から出定した者の果定について私は問おう、と、問うている。というのは、残りの定から出定することは有分によってであるが、滅から出定することは、観の等流としての果定によるからである。
(*Papañcasūdanī*, PTS, vol. II 352.9-12)

ブッダゴーサの註釈によれば「無相の心解脱」（無相の心定）とは滅尽定から出定した者の果定（*phalasamāpatti*）とされる。同經典では、先程も述べたように想受滅定に入定した者と、死去している者との違いが議論となっている。その文脈で「無相の心解脱」が取り上げられたことに関して、ブッダゴーサはこのように解釈しているのである。つまり、「無相の心定」は「観」と註釈されていたが、身・口・意が滅した想受滅定（滅尽定）から出定するためには、観のはたらきがあり、その観を無相の心定（無相の心解脱）として捉えているのである。なぜ無相の心定が想受滅定の果としての定と解釈されているのか。次の MN 第 44 経「小有明経」の一節が手がかりになる。

友ヴィサーカよ、想受滅定から既に出定した比丘に、三つの接触が触れます。空性の接触、無相の接触、無願の接触であります。（MN, PTS, vol. I 302.20-22）

当該文献では想受滅定から出定した比丘には、空・無相・無願の三三昧が接触すると示す。このニカーヤに対するブッダゴーサの註釈は以下のようなものである。

というのは、空性・無相・無願というのは、観であるとも言われるからである。その中で、比丘が諸行を無常として把握して、無常として見て、無常から出定する、その者の出定に至る観は無相と呼ばれるのである。苦として把握し、苦として見て、苦から出定する。その者の〔出定に至る観は〕無願と呼ばれる。無我として把握し、無我として見て、無我から出定する、その者の〔出定に至る観は〕空性と呼ばれる。その中で無相の観による道が無相と呼ばれる。無相の果定とともに生ずる接触が触するとき、無相の接触が触すると言われる。（*Papañcasūdanī*, PTS, vol. II 367.12-22）

この注釈によると、ブッダゴーサは、空・無相・無願の三三昧を想受滅定の果定として考えている。「大有明経」では無相定のみが言われていたが、この註釈によれば、諸行を無常・苦・無我のいずれの観点から観察するかの違いによって、空・無相・無願となるが、いずれにせよ想受滅定の果定とされる。以上、ブッダゴーサは無相の心定を、想受滅定からの出定を促す観であり、想受滅定を経験した者が、涅槃を所縁とし住する果定であると解釈していることが分かった。

(128) 大乘菩薩道における無相と滅尽定の背景について (太 田)

おわりに ブッダゴーサによれば、想受滅定と無相の心定との関係は以上のよう
に定義されていた。つまり、無相の心定は想受滅定からの出定を助力する観で
あり、それは果定と言われる。このことから、ブッダゴーサの註釈に基づけば『入
中論』における滅尽定と『修習次第』における無相との表現の差違は、最高位の
禪定に関してどちらの側面に着目したかの違いであることになる。

- 1) 『入中論』第六章（偈頌のみ）のサンスクリットに関しては李 [2012], Li [2015] 参
照。 2) MABh 342.17-19 参照。 3) 『十地経』の当該箇所は DBhS 122.6-123.8
を参照。 4) ナーガールジュナは『ラトナーヴァリー』の第 5 章の中で菩薩の十地
について簡潔に説いている。その中滅尽定に関する記述が見られるのは第 51 偈（第六
地）と第 53 偈（第七地）においてである。 5) SNS 122-148 参照。 6)
Schmithausen [1981: 235-236].

〈略号表〉

BhK I *First Bhāvanākrama*. In *Minor Buddhist Texts, part II*. Ed. Giuseppe Tucci. Serie Orientale
Roma, vol. IX. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1958. **DBhS**
Daśabhūmikasūtra. Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtram. Ed. Kondō Ryūkō. Tokyo: Daijyō
Bukkyō Kenyō-Kai, 1936. **MA** *Madhyamakāvatāra*. Ed. Louis de la Vallée Poussin. Bibliotheca
Buddhica IX. St. Pétersbourg, Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, 1907-1912.
MN *Majjhimanikāya*. Ed. V. Trenckner. 3 vols. London: PTS, 1888-1899. **SN** *Saṃyuttanikāya*.
Ed. G. A. Somaratne and M. Léon Feer. 5 vols. London: PTS, 1884-1904. **SNS** *Samdhi-
nirmocanasūtra. Samdhinirmocana sūtra: l'Explication des mystères; Texte Tibétain*. Ed. Étienne
Lamotte. Louvain: Bureaux du Recueil, Bibliothèque de l'Université, 1935.

〈参考文献〉

- Schmithausen, L. 1981. "On Some Aspects of Descriptions or Theories of 'Liberating Insight'
and 'Enlightenment' in Early Buddhism." In *Studien zum Jainismus und Buddhismus:
Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, ed. Klaus Bruhn and Albrecht Wezler, 199-250. Alt- und
Neu-Indische Studien 23. Wiesbaden: F. Steiner.
李学竹 2012 「《入中論》第六章 1-97 頌校勘」『中国藏学』1: 1-16.
Li Xuezhu. 2015. "Madhyamakāvatāra-kārikā Chapter 6." *Journal of Indian Philosophy* 43: 1-30.
一郷正道 2011 『瑜伽行中観派の修道論の解明——『修習次第』の研究——』2008 年度～
2010 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 成果報告書。

(本研究は JSPS 特別研究員奨励費 15J40254 による研究成果の一部である)

〈キーワード〉 滅尽定, 無相, 無相の心定

(日本学術振興会特別研究員, 博士 (文学))